

西欧キリスト教大学の誕生の原点と教育的使命に関する一考察

A Study on the Origin and the Educational Mission of the Birth of Western Christian University

楊 尚 眞
Sang Jin Yang

はじめに

歴史的にキリスト教大学は、基本的には、教会の成長と福音宣教の二重の目的を実現するために誕生し発展してきた。教会の成長のためには、聖職者養成と教育が必要であった。それは、福音宣教のために宣教地域の文化や歴史、伝統を研究し、教えることができる様々な学者や信徒の指導者を養成することであった。しかし現代社会においては、多くのキリスト教大学は、本来のこのような目的を保持できないばかりか、キリスト教大学の教育的使命でさえ大きな挑戦を受けている。それは、ポストモダニズムの現代社会において、絶対的な真理はなく、すべての真理は相対的であるという思想が社会に浸透し、学問における多元的な価値観を受容することによってキリスト教大学の福音宣教の使命が希薄になっている。また、その宣教的使命の課題よりも、現代科学の機械技術文明と新しい世俗的文化に対してキリスト教大学の門戸を開いてそれらを積極的に取り入れなければ、大学の存続の危機に直面する時代的な課題を受け入れてから久しい。すなわち、現代のキリスト教大学は、内面的に固有なキリスト教の伝統の固守という問題意識をもつと共に、対外的に新しい時代の機械・科学技術と世俗文化を積極的に受け入れて学問化しなければ、存立の危機に直面せざるを得ないのである。しかしながら、時代が変わってもキリスト教大学の教育的な使命には、高等教育、学問的な研究を、キリスト教によって寄与しなければならないという認識を持つことが求められる。教育と研究という展開がキリスト教との関りと希薄化しているのではないか。キリスト教大学としての教育と研究の明確な方向感覚をもっていないのではないか。

キリスト教大学の誕生は西欧諸国において一般の大学の歴史と密接な関係があるので、全体的な大学発展の過程を通じて、キリスト教大学の成果の特性を理解することができる。歴史的に西洋文化がキリスト教的文化の土台の上で形成され、発展されたため、キリスト教大学と一般の世俗大学との相違を区別するのは非常に難しいことも事実である。

直接的なキリスト教大学の誕生とその特殊性は、西欧の大学制度を基準として生まれたアメリカの大学の始まりとその建学の理念を通して明らかなになる。このような西欧とアメリカのキリスト教大学の誕生の過程を検証することを通じて、キリスト教大学の特徴、特にアメリカ人の宣教師によって設立された日本のキリスト教大学のキリスト教教育を分析・改善することにおいても大きな手掛かりとなることができよう。本論文においての著者の意図は、西欧キリスト教大学誕生の原点であるキリスト教大学の教育の必要性を検証しながら、日本のキリスト教大学のキリスト教教育に焦点を当て課題を提起することである。

1. キリスト教大学の背景

アメリカの神学者ラインホルド・ニーバー (Reinhold Niebuhr) は、彼の論文「西欧文化の二つの起源」で西欧文化を生成してきた二重的起源を「ヘブライ的なもの」と「ギリシャ的なもの」である

と解釈している。¹ 「ヘブライ的なもの」の特徴は、神の恵みと愛の中で、人間の問題を解決しようとする信仰の次元であり、「ギリシャ的なもの」の特徴とは、宇宙の秩序と構造の意味を追求する理性の次元として理解されている。歴史的な経験によって、信仰と理性は、人間の内面世界の属性に統合され、それは、すなわち、西欧文化の二つの次元で構成された形で表れている。このように西洋文化はヘブライ的な霊的遺産とギリシャ的な理性的遺産という二つの潮流によって、そのきらびやかな過去を形成してきており、二つの文化の根から12世紀初頭、新しい教育の場である「大学」という学問共同体を誕生させた決定的な要因となった。エルサレムによって象徴されてきたヘブライ的な信仰的、宗教的遺産とアテネによって象徴されてきたギリシャ的な理性的哲学の遺産が融合して新たな西欧文化を創造し、その母体は、学問の共同体の総合芸術である大学で形成されてきた。

人類文化史における大学の誕生は、それまで分散されて発展してきた様々な教育機関の類型を一つに統合した歴史的な貢献であると言えよう。ここで先ず、大学が誕生した背景には、社会的な意味、教育的な意味、そして神学的な意味の3つの次元に提示することができる。² 大学が誕生した社会的な状況と背景は11世紀のいわゆる「都市社会と都市世界」が形成された時から始まる。³ 中世の都市社会の出現は、封建制度の構造の崩壊をもたらしながら結果的に、それ自体が新しい社会文化を創造し始めた。このような社会的背景は、大学が教皇と君主の統治からの自由が保障されている新しい政治的、社会的な領域に変貌し始めたということを意味する。都市社会の出現とともに、その内部には、新しい中間層である「コミューン」(Commune) という新しい共同体が登場することになった。コミューンは、一つの組み合わせの形で現れ、すぐに大学の基礎となったのである。⁴

第二に、最初の大学は、その当時、教育的な要因として誕生したのである。大学以前の教育的雰囲気はギリシャ系のアカデミー (Academy) とリキウム (Lyceum) そしてヘブライ系の教理問答学校、修道院学校、教区学校、本堂学校から発展した多様な学校が大学の誕生を可能にした。このような学校の類型は、古代から中世に至るまでギリシャ文化とヘブライ文化の影響によって各々と独特に発展してきた過程から、最終的には大学の誕生を可能にした学問研究の母体となった。

第三に、大学を誕生させた第三の要因としては、「ヘブライ的なもの」と「ギリシャ的なもの」の出会いを試みようとする神学的・哲学的傾向を挙げることができる。例えば、ヨハネによる福音書は、イエス・キリストの福音をギリシャ哲学のロゴス概念に解釈し、使徒パウロは、ユダヤ人の「信仰」とギリシャの「知恵」をイエス・キリストの十字架の出来事として解釈して「啓示と理性」、「信仰と思考」の関係性として解釈しようとした。

上記の三つの要因や背景によって、世界初の大学として1119年に、イタリアのボローニャ (Bologna) 大学と1200年にフランスのパリ (Paris) の大学が誕生した当時、パリ大学は、最も広く知られている大学として発展し、他の大学の重要なモデルとなった。⁵ 二つの大学は、国家から独立した知性の王国として固有の領域を保障されていた。しかし、パリ大学とボローニャ大学の間には、いくつかの構造的特徴と相違性を表わしていた。前者はカトリック教会との深い関係を保ちながら、聖職者養成のための神学教育に重点を置き、教授中心の教育行政体制を維持した。後者は、聖職者養成教育や宗教教育中心ではなく、法律を中心に研究している信徒たちのための知識的教育と学生中心の行政体制を維持していた。⁶

実際に、中世期からこの二つの類型の大学が発展してきた。パリ大学は、教授たちが中心となって学校を運営しており、ボローニャ大学は、学生が学問的な政策に責任を担いながら深く関与した。また、この第一の類型は、英国のオックスフォード、ケンブリッジとドイツのハイテルベルクであり、第二の類型は、イタリア、スペイン、南フランスで発展した。両方の類型は、大学が学問の強調と運営を分けて、中世の大学の発展に多大な影響を与えたにもかかわらず、両者の間には、多くの共通点を有している。このような中世の大学が歴史の中で最初の大学のモデルとして発展し、現代の大学の性格と理念を形成した歴史性を有している。

中世の大学の誕生と成長は、その当時のすべての歴史と伝統と文化と必然的な関係があった。その当時、複数の地域で形成された、様々な組合が連合して、大きな学術運動を展開した。例えば、同じ都市における同じ職人の複数の組合、旅行者の複数の組合、商人、俳優、芸術家、兵士たちの複数の組合、さらに宗教者の複数の組合があった。⁷ 中世の大学はスコラ学風の影響を受け入れた様々な組合の形態から発展し、それは特に学問の研究のために同じ場所に集まった人たちを中心に構成された。⁸ 学校の組合の中には、教師たちが集まった教師の組合と学生たちで構成された学生の組合があって、同じ精神と目的、関心と責任性のために、共同の関心を代弁し、それらに付与された権利と特権を認められるために活動した。

一方、11世紀初頭、ローマ・カトリック教会は、新しい教育政策を発表し、その当時それに存続してきた修道院学校、聖堂学校及び教区学校が活発的に発展し、今日の大学として登場した。このような学校を中心にラテンキリスト教圏にあった全地域において学生たちが専門的な知識を習得するために学識がある有能な教師たちが集まり始めた。⁹ その当時、学生たちは一人の教師、あるいは、一つの学校で学問することに満足せず、より広い学問の世界に接するために、他の学校へ、或いは、名声のある教師を見つけて学ぶために移動したため、より偉大な学者たちが登場するようになり、新しい学生が伝統のある学校になって集まり始めた。

中世の大学に集まっていた学生は、宗教に対する関心だけでなく、世俗的な学問に対して大きな関心を持つとともに教育施設の拡張と学問の専門化に深い関心を示した。それまで聖職者養成が中心となっていたすべてのカリキュラムが開放され聖職を志望する学生らにもより専門化された学問が紹介された。¹⁰ その当時の大学は哲学（人文科学）、法学、医学、神学の四学部の中で哲学（人文科学）を集中的に発展させてきた。その理由としては、大学が公に専門研究機関で認められるために人文科学を中心とする専門的な上級学部を開設することを望んだからである。このように、ヨーロッパ全地域で高等教育を受けるために集まって学生たちは、大学で専門化された四つの学問分野である哲学、法学、医学、神学を最高学府での研究するようになった。大学が扱う科目のうち、神学は魂のバランスを、哲学は知能のバランス、医学は生命機能のバランス、および法学は外面的な問題のバランスを回復させていた。¹¹

フランスとイタリアで始まった大学の登場から15世紀末に至ってヨーロッパ全体に50以上の大学に増加し、その大学は学問の優位性を追求する教授と学生の共同体という一つの基本的な性格を共有していた。幾つかの国において入学した学生は、寄宿舎を中心に研究し生活をする国際的な共同体を成していたのである。その当時、大学の肯定的な面は、大学生の共同生活を通じて徹底した「平等意識」が強調され、その思想が、その当時には、社会悪として存在していた、貴族と庶民の階級的な区分を打破し、社会階層の差別化意識が払拭されて、結果的に封建社会を変化させる直接的な原因となったのである。

上記で示した最初の大学の貢献を次のように評価することができる。何よりも、中世の大学の登場は、当時の封建君主体制から民主主義の共同体を植え付けた政治的变化に多大な貢献をした結果となった。また、その当時、国家を代弁する王権と教会を代弁する法王の間で頻繁に生じた軋轢関係から大学は両者の牽制勢力として登場し、社会の変化に主導的な役割を果たすようになった。さらに重要なことは、その当時、大学はリチャード・ニーバーが分析したように、ギリシャ思想とヘブライ思想を融合するユニークな形で登場したという事実である。中世大学は、人間の内面世界の属性である信仰と理性の両次元を受け入れ、大学教育を最初からヘブライ的なものとギリシャ的なものとの統合による新しい学問を発展させることに貢献した。

最初に登場した中世の大学は、信仰を重要なテーマとしていた神学と、理性の問題を扱っていた哲学を中心とした人文科学を、重要な研究課題として中世のキリスト教文化の発展に大きく貢献した。初期の中世の大学で教育の主要な機能としては、まず、宗教的信仰を伝授するものであり、第二には、哲学を中心に自然観察を通じた宇宙の秩序と原理の探求も同じ二重的な機能を遂行してきた。このような中世の大学においては、「神の愛」(love of God) で表現される信仰とは、「学問の愛」(love of learning)

を可能にする理性両者の弁証法的関係を通して宗教的信仰と学問を保存し伝授してきた教育活動を本質的な使命として継承されてきた。

2. キリスト教大学のモデル

中世期に誕生した最初の諸大学には、様々な思想運動と文化の影響によって新たな形で変遷してきた歴史的発展の過程があった。特に、13世紀のトーマス・アクィナス (Thomas Aquinas) がアリストテレスの思想とキリスト教神学を統合させたトーマス思想、16世紀の宗教改革者たちによってトーマス思想を根本的に揺さぶったプロテスタント運動、同じ世紀に英国のフランシス・ベーコン (Francis Bacon) による新しい科学の精神を標榜した自然主義、17世紀のドイツのフランケ (Hermann Francke) による敬虔主義運動、18世紀英国のジョン・ロック (John Locke) による経験主義の発展、及び、フランスのルソー (J. Rousseau) によるロマン主義思想¹²などが、大学の発展に絶大な影響を与えた。このような文化・思想的背景の下で、西欧の大学は中世の大学のモデルの枠組みから脱却し、新たな科学的知識と学問を発展させた。しかし、新しい科学の精神と多様な学問分野の追求と探求によって発展してきた大学は、大学の本来の基礎となっていた「信仰と理性」、両者の弁証法的な関係を固守し維持してきことは事実である。ヨーロッパで、人本主義思想とプロテスタントの信仰教育と科学性を尊重する事実主義 (Realism) が、アメリカにおける最初のキリスト教の大学であるハーバード大学 (Harvard College) を設立した決定的な影響を与えた。1636年に新たなキリスト教の大学のモデルとして設立されたハーバード大学は、ヨーロッパ思想の二つの枝である「信仰と理性」、或いは、敬虔と知性の統合を継承しつつ、従来のヨーロッパの大学のモデルと異なる思想の背景を持って発展した。¹³

アメリカ大陸の最初の大学であるハーバード大学は、英国のオックスフォードとケンブリッジ大学が残した学問の二つの源流であった「敬虔と知性」(Piety and Intellect) の域を、新大陸に建て始めたのである。¹⁴ ジョン・ハーバード (John Harvard) は、「新しい安息所、礼拝の家、そして行政の構造」と呼ばれる新しい旗を掲げて百人余りのケンブリッジ大学出身者と30名のオックスフォード大学出身者たちによって設立された。無論、その設立目的と、その概念は、非常に複雑なものであったが、新大陸における新教徒の信仰と精神を再創造しようとするものであった。

清教徒たちは、彼らの重大な使命として「神に仕え、隣人への奉仕」を熱望して清潔な生活を営むことであったので、彼らはこのような将来の責任を認識していた。国家のために有能な為政者たち、教会のために学識のある牧師、社会において知性を兼ね備えた指導者と教養人を必要としたことを認識していたのである。新教徒たちは、彼らの人生の目的を表わしたすべての事柄を聖書に基づいていたために、有能な聖書解説者たちと牧会者の訓練を強調したのである。それと同時に、社会においては、先祖の遺産である知恵と学問と科学に対する強い責任を痛感していたために、専門性を兼ね備えた教育指導者たちを求めている。したがって、ハーバード大学は、学校の教師や教育者、牧師、政治家、社会の指導者を養成する教育の中心地となった。

キリスト教大学としてハーバード大学が四世紀の長い歴史の中で発展しながら、それ自体の独特な伝統を継承したのは、その大学だけが創出した歴史的特性と遺産があった。それは信仰と学問を一つの共同体の中で統合する新しい試みを通して、その当時、新大陸の開拓地であるアメリカの社会が要求した人材を養成する創造的モデルへと発展した。さらにハーバード大学は、英国のオックスフォード大学とケンブリッジインマヌエル大学の原型を用いて、学生訓練とカリキュラム、行政制度と規範を米国的風土に導入し変形させることに成功した。このような大学の構成を通して、ハーバード大学の教育目的は、最初から神を知り、永遠の命を得て、さらにアメリカの社会に「聖なる国家」(Holy Commonwealth) を建設するための聖職者養成と社会の分野における信徒指導者養成に力を注いだ。¹⁵ ハーバード大学の構成と制度は、キリスト教大学の最初のモデルとして発展しており、学生の大学生活は、寄宿舎を中

心に共同体生活を営むようにして教授と学生との密接な関係を強調した。大学の宗教的活動として全学生のチャペル礼拝、定期的な祈祷会、教会出席、神学訓練、宗教クラブと大学復興聖会参加による徹底した宗教的・道徳教育と訓練を要求したこのようなハーバード大学の教育はリチャード・ニーバー(Richard Niebuhr)の分析通り、ハーバードが「文化を変革するキリスト」¹⁶(Christ as transformer of culture)の構造をそのまま実践したキリスト教大学のモデルとして発展したのである。

3. 日本のキリスト教大学のキリスト教教育

日本のキリスト教の大学は、西欧キリスト教大学の影響を受けて、キリスト教信仰による教育機構を形成し、発展させて、キリスト教教育の働きによって、日本の文化的な改革を企画してきた。そしてその設立当初からキリスト教を土台にして人間教育、人格教育、全人教育を行ってきた。そして、特にキリスト教大学には戦前からリベラルアーツ教育の伝統があり、宣教師たちの働きによって古典的欧米型大学の教育方法が日本に導入された。

一般的に、リベラルアーツ教育は、少人数制体制による教育が行われる。少人数制指導の中で基礎的な教養を磨くとともに、物の考え方を養うことに重点を置いている点で、リベラルアーツ教育は専門の学科や職業課程と対比されてきた。¹⁷ しかしながら、そのリベラルアーツを基盤するキリスト教教育の働きは、伝統的な文化的・政治的・社会的・経済的、そして教育的な観念に対して、批判的な面があったために、既成の日本社会の中において、それを受容し、理解し、協力・支援する社会的な機構を十分に得ることはできなかったのは事実である。¹⁸

日本の教育には実利優先の考え方が強くあり、慶應義塾大学や早稲田大学といった非キリスト教の大学も実学を重要視してきたが、キリスト教の大学も、また、実学を重視してきた側面がある。また、実学と教養教育の両面のバランスを維持することを教育の特徴としてきた。さらに靈性も加えた全人的な教育に精力的に取り組んできたが、キリスト教大学の大量化、世俗化、大綱化の波によって、キリスト教大学の建学精神とキリスト教教育は次第に軽視され、キリスト教関連の学科目や大学礼拝などが大学の中心から周辺に追いやられるようになってしまったのである。¹⁹ 即ち、キリスト教大学がキリスト教の看板だけを掲げ、その教育内容は一般の私立大学とさほど変わらないとしたらキリスト教大学として教育的使命のあり方が問われるのではないか。

終わりに

キリスト教大学は、その建学の精神は聖書の教えに基づいており、それを保持しながらキリスト教教育を行うという使命があるが、克服すべき課題が多い現代社会、即ち、無縁社会における人間疎外や共同体の崩壊などが叫ばれている現代社会において、その使命は終わることがない。世界中に存在するキリスト教大学も少子化や経済的な不況の影響を受けて、「大学の存続」のためにしのぎを削る中で、キリスト教教育より大学経営に重きを置きながら、生存し続けているのが現状ではないか。しかし、キリスト教大学がキリスト教教育の使命という主体性を失ってしまえば、イエスが言われた、「畏神愛人」及び「世の光と地の塩」²⁰の使命を果たすことができず、社会の隅に捨てられてしまう存在に陥ってしまう。

キリスト教大学は、その歴史において、キリスト教信仰者を生み出してきたが、影響力ある社会のリーダーたちを輩出してきた。利己的な人間ではなく、社会的な弱者や社会のニーズに対して積極的に奉仕する人たち、世界平和を構築することに努める人々を育成してきたのは事実である。その遺産を強調し、そのキリスト教の精神や建学の精神を絶えず大学教育の場で促しながら人材育成に努めることがキリスト教大学に切に求められることである。

注

- 1 Reinhold Niebure, "The Two Sources of Western Culture", *The Christian Idea of Education*, ed., Edmund Fuller (Yale University, New Haven, 1957), 237-254
- 2 殷俊寛、「基督教教育現場論」(大韓基督教書会) 一九八八年
- 3 Christopher Dawson, *Religion and the Rise of Western Culture* (New York: McGraw-Hill Book Co, 1962), 319.
- 4 同じ都市に集まった組合では技能工の組合、旅行者の組合、商人、俳優、芸術人、病人たち、教師及び学生たちの組合があった。
- 5 Nathan Schachner, *The Medieval Universities* (Philadelphia: J. b. Lippincotte Co.), 56
- 6 殷俊寛、「キリスト教大学の主体性の危機と未来」『現代と神学』第10集(延世大学校 連合神学大学院、1985), 156.
- 7 Edward J. Power, *Main Currents in the History of Education* (New York: Sheed & Ward, 1959), 193.
- 8 Lewis J. Shemill, *The Rise of Christian Education* (New York: Macmillan Co., 1944), 259.
- 9 Edward J. Power, 317
- 10 Ibid., 318
- 11 John Amos Comenius, *The Great Didactic*. Trans., by M. w. Keatinge (New York: Russell & Russell, 1900), 259.
- 12 John S. Brubacher, *A History of the Problem of Education* (New York: McGraw-Hill Book Co., 1966), 109-122.
- 13 アメリカにおいてハーバート大学創立以来、創立されたキリスト教大学は殆ど同じ目的と理念で1770年以前に建てられた。例えば、ウィリアムとメリー大学(1693年) イェール大学(1701年)、プリンストン大学(1746年)、ペンシルバニア大学(1766年)等
- 14 Frederick Rudolph, *The American College and University. A History* (New York: Vintage Books, 1962), 3.
- 15 John S. Brubacher, *Higher Education in Transition* (New York: Harper & Brothers, 1985), 6.
- 16 H. Richard Niebuhr, *Christ and Culture* (New York: Harper & Brothers, 1951), 190.
- 17 伊藤悟「キリスト教大学における教養教育」青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究部編『キリスト教大学の使命と課題』教文館二〇一一年、一三三頁
- 18 雨貝行磨「キリスト教教育の使命」ヨルダン社、一九九二年、二三三頁
- 19 伊藤悟「キリスト教大学における教養教育」青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究部編『キリスト教大学の使命と課題』教文館二〇一一年、一三四頁
- 20 マタイによる福音書5章13節~14節を参照せよ。

参考文献

1. Brubacher, John S., *A History of the Problem of Education* (New York: McGraw-Hill Book Co., 1966)
2. Brubacher, John S., *Higher Education in Transition* (New York: Harper & Brothers, 1985)
3. Comenius John Amos., *The Great Didactic*. Trans., by M. w. Keatinge (New York: Russell & Russell, 1900)
4. Dawson, Christopher., *Religion and the Rise of Western Culture* (New York: McGraw-Hill Book Co, 1962)
5. Niebuhr, H. Richard., *Christ and Culture* (New York: Harper & Brothers, 1951)
6. Niebure, Reinhold. , "The Two Sources of Western Culture", *The Christian Idea of Education*, ed., Edmund Fuller (Yale University, New Haven, 1957)
7. Schachner, Nathan., *The Medieval Universities* (Philadelphia: J. b. Lippincotte Co.,)
8. Power, Edward J., *Main Currents in the History of Education*, (New York: Sheed & Ward, 1959)
9. Shemill Lewis J., *The Rise of Christian Education* (New York: Macmillan Co., 1944)
10. Rudolph, Frederick., *The American College and University. A History* (New York: Vintage Books, 1962)
11. 伊藤悟「キリスト教大学における教養教育」青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究部編『キリスト教大学の使命と課題』教文館二〇一一年
12. 雨貝行磨「キリスト教教育の使命」ヨルダン社、一九九二年
13. 殷俊寛、「基督教教育現場論」(大韓基督教書会) 一九八八年
14. 殷俊寛、「キリスト教大学の主体性の危機と未来」『現代と神学』第10集(延世大学校 連合神学大学院、1985)